様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３８１１３８

研究課題名（和文）教授学習メディアとしての文字言語とノート使用における実証的比較文化的基礎研究

研究課題名（英文）An Empirical Baseline Research of Comparative Educational Culture on Usages of Written Language and Notebooks as Teaching-Learning Media

研究代表者
添田　晴雄（SOEDA, Haruo）

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：３０２４４６２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：書字随伴型学習およびそれを支援する書字随伴型授業が日本の学習・教育文化の特徴であることを、日本、アメリカ、イタリア、スロベニアの数学の授業分析により明らかにした。学級活動の話し合い活動には、「出し合う」「比べ合う」「まとめる」の3つの段階があるが、このうち、「比べ合う」の段階を理論的に研究した先行研究がほとんどなく、実践でも「出し合う」との差異がないものや、安易な多数決として「まとめる」の一部となっていることが判明した。「比べ合う」の理論的基盤として比較教育学の理論を援用すること、そして、それを踏まえて黒板やノートを使った文字を介した「比べ合う」活動の在り方を検討することの方向性が見えてきた。

研究成果の概要（英文）： The research has revealed that learning with writing characters and teaching with writing characters to support such learning are characteristics of Japanese learning-teaching culture, through analyses of video-taped classroom interactions in Mathematics in the USA, Italy, Slovenia, and Japan. At a ‘Comparing’ phase, which is one of three phases of classroom meeting, ‘Expressing of opinions’, ’Comparing’, and ’Forming conclusion’, students tend NOT to compare opinions at all. They just express new opinions as at an ‘Expressing of opinions’phase, or they decide by a majority through ‘Comparing’. It is confirmed that it is adequate to apply a theory of comparison used in comparative education study to the ‘Comparing’ phase of students at classroom meetings.

研究分野：比較教育学／特別活動論

キーワード：話合い活動　板書　ノート　音声言語　文字言語　書字随伴型学習

１．研究開始当初の背景

現行の学習指導要領では、言語活動の充実が重視されている。中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」にも、「各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である」と明記されており、重点的な取り組みが期待されている。これまで、各教科における言語活動とは何か、具体的に言語活動を各教科の指導の中にどのように導入するのか等の研究がなされ、記録、要約、論述、説明、発表、討論、討議、議論などの具体的活動がさかんに言及されている。しかしながら、これらの言語活動を媒介する文字言語・音声言語の学習場面、教授場面における文化的役割に着目して、実践現場における言語活動のあり方を論じた研究はほとんどない。もっとも、授業のコミュニケーション分析に関する研究は、フランダース（Ned A. Flanders）らが、1970年に提唱したＦＩＡＣ（Flanders Interaction Analysis Categories）以来の相互作用（interaction）分析の研究の蓄積がある。しかしながら、これらの相互作用分析は、授業におけるコミュニケーションのうち、音声言語でとらえられる側面、つまり verbal な側面の分析に限られていた。そして、教師が板書をしたり、生徒の発表を教師が摘書（板書）したりする行為や生徒がノートに文字言語を書く行為は、分析の対象から除外されていた。結論を先取りすれば、言語活動の指導を有効に行うためには、日本の教育文化の文脈において、学習教授メディアとしての文字言語・音声言語がどのような役割を果たしているかという視点からの研究とそれに基づく教育方法が構築されなければならないが、残念ながらその基礎的研究の蓄積がなされていないのが現状である。

２．研究の目的

(1)児童生徒がノートに文字言語を書き付ける行為を量的に分析ができるような分析手法と指標を、申請代表者が開発し上記のさまざまな先行研究で使用してきた手法と指標（「研究計画・方法」の頁で詳述）に改良を加えることによって開発し、さらにノートに書かれた文字言語が学習教授活動に果たす役割を質的に分析する指標を開発する、(2)その手法と指標を、日本とアメリカの国語（英語）と学級会（ホームルーム）の授業に適用して分析を行ない、それを比較教育文化的に考察する、(3)これらの知見をもとに、日本の教育文化に適合したノート使用のあり方、学習教授場面における児童生徒の文字言語のあり方、および、それらの指導のあり方について考察することを目的とする。

３．研究の方法

(1)日本の国語と学級会の授業をビデオ撮影し、かつ、数人の児童生徒の机上をビデオ撮影し、それを使った児童生徒がノート等に文字言語を書き付ける頻度を量的に把握する手法と指標を開発する。(2)日本の国語と学級会の授業でノート等に書かれる文字言語が学習全体に果たす役割を質的に分析する手法と指標を開発する。(3)日本の国語と学級会の授業を開発された手法と指標を適用して分析した結果を蓄積し、日本の児童生徒の授業中における文字言語使用状況の特徴と意義を仮説的に特定する。(4)アメリカの国語（英語）と学級会（ホームルーム）を上記の方法で分析し、日米の児童生徒の授業中に於ける文字言語使用状況の特徴と意義を比較教育文化的に考察する。(5)得られた比較教育文化的知見をもとに、日本の授業における児童生徒の文字言語活動の指導のあり方について考察する。

４．研究成果

(1) 小学校においてアンサーボード（A3 判大の小型ホワイトボード）を使って、児童の話合い活動を活性化させた実践記録を分析し、実践者にインタビューを行った。児童は、アンサーボードを用いることにより、口頭発表の準備として自らの考えを可視化しながらまとめるこができる。また、口頭発表の際にアンサーボードを使うことにより、ポイントを押さえた説明ができるようになる。さらに、時間の関係上等で全員が口頭発表できないような場面でも、アンサーボードを提示することにより、児童は発表行動に準じた満足感を得ることができる。これらの効果により、児童の話し合い活動が活性化されていた。

また、「学級活動ノート」（形態はワークシート）を使った学級活動を実践している教員にインタビューを行った。話合いの柱を記述させた上で、それに対する自分の考えを書かせる。それを踏まえた上で、口頭による話合いをすれば、口頭の発言が苦手な児童も比較的容易に議論に参加することができる。

「学級活動ノート」には、音声言語によるコミュニケーションを前にして、文字による思考の可視化を通して意見をまとめる効果が認められた。また、アンサーボードでは、これに加えて、音声によるコミュニケーションを補足する効果が確認できた。

(2) 主に音声言語で展開される「話し合い」活動における文字言語の役割について次のような意義を見出した。

学級活動のうちの、学級や学校の生活づくりに関わる話し合い活動では、何をするか、どのようにするか、係分担はどうするかの課題について、意見を出し合う、比べ合う、まとめる（決める）という構造化が求められる。これらをすべて音声言語だけで展開してしまうと、話し合いが得意な一部の児童生徒だけで議論が進んでしまう。文字依存性の強い日本語の文脈ではそれに拍車がかかる。板書

などにより、思考を可視化し、思考の操作化を促す必要がある。日本の学校では教科学習や学級活動に黒板が多用される。日本語の文字依存性の特徴から、意思疎通を確実にするために音声言語を補うための文字言語が使用されてきたが、その学習文化の基盤が、話し合い活動の構造化、可視化、操作化に寄与しうる。

また、集団による議論に先立ち、個々人が自らの意見をある程度まとめておくと、集団討論が活性化する。とくに話し合い活動が不得意な児童生徒にとって、この予備的思考が不可欠である。この予備的思考の段階においても、ノート等に文字言語を書き付けることにより、思考を可視化し、操作化することができる。日本には書きながら学ぶという学習文化が根付いていた。それは日本語の文字依存性による。ノートに文字を書く習慣を話し合い活動の準備として活用すれば、話し合い活動の活性化に寄与するし、話し合い活動が得意でない児童生徒でも話し合い活動に参加しやすくなり、それが、民主的な社会参画への資質・能力の基盤となりうる。

(3) 書字随伴型学習およびそれを支援する書字随伴型授業が日本の学習・教育文化の特徴であることを、定量的国際併置比較（日本、アメリカ、イタリア、スロベニアの数学の授業分析により日本の授業が書字随伴型の特徴をもつことを明らかにした）、歴史的文化的国際併置比較（江戸時代の日本は、文字を書くことが学習内容であり学習方法であったこと、西洋の中世から近代の授業では、音声中心型の授業がなされていたことを明らかにした）、関係比較の分析（石盤の日本への導入とその石盤が教育史的に果たした役割を分析し、書字随伴型学習の教育文化が保持されたことを明らかにした。また、「より深層にある学習・教育文化」の存在を仮定することにより、現代の教育改革においても書字随伴型学習文化の特徴を踏まえた工夫が必要であることを提案した）により、明らかにすることができた。

学級活動の話し合い活動には、「出し合う」「比べ合う」「まとめる」の 3 つの段階があるが、このうち、「比べ合う」の段階を理論的に研究した先行研究がほとんどなく、実践でも「出し合う」との差異がないものや、安易な多数決として「まとめる」の一部となっていることが判明した。「比べ合う」の理論的基盤として比較教育学の理論を援用すること、そして、それを踏まえて黒板やノートを使った文字を介した「比べ合う」活動の在り方を検討することの方向性が見えてきた。

また、国語などのアクティブ・ラーニングにおいても、ノートやワークシートを使うことにより、音声言語による話し合いの場合よりも、より深く学ぶことができる実践の方向性も見えてきた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①添田晴雄「特別活動における『見方・考え方』」「特別活動が求める資質・能力」、有村久春編著『平成 29 年改訂　小学校教育課程実践講座　特別活動』ぎょうせい、7～9 頁、10～12 頁、査読無、2017 年 12 月 15 日

②添田晴雄「これからの学級活動（１）「学級会」の授業を考える」（日本特別活動学会平成 29 年度第１回研究会公開シンポジウム「学級会は、何をどのように話合い、どのように合意形成を図ればいいのか」、『日本特別活動学会会報』第 75 号、7 頁、査読無、2017 年 8 月 5 日

③添田晴雄（学位請求論文）「文字言語・音声言語からみた学習・教育文化の比較研究」大阪市立大学、全 264 頁、査読有、2017 年 6 月 30 日

④添田晴雄『アクティブ・ラーニングの考え方と実践』（大阪市立大学教員免許更新講習選択必修テキスト）、大阪市立大学、全 20 頁、査読無、2016 年 8 月 12 日

⑤森　久佳「シカゴ時代（1894-1904 年）におけるデューイの『レシテーション（recitation）』論の特色に関する一考察：デューイによる「学び（learning）のタイプ」のとらえ方に着目して」、大阪市立大学大学院文学研究科『人文研究』67 号、123～139 頁、査読有、2015 年

⑥廣瀬真琴、宮橋小百合、木原俊行、森　久佳、深見俊崇、矢野裕俊「新たな専門的な学習共同体のネットワーク化としての Instructional Rounds：授業分析に基づいた学区の教育及び学校改革」、大阪市立大学大学院文学研究科教育学教室『教育学論集』第 4（通号 41）号、17～29 頁、査読有、2015 年

⑦添田晴雄「文字を介した話合い活動の必要性と意義」、日本特別活動学会「日本特別活動学会会報」第 67 号、12～13 頁、査読無、2014 年 12 月 13 日

⑧添田晴雄「文字からみた学習文化の比較」、辻本雅史編著『身体・メディアと教育（論集　現代日本の教育史７）』、日本図書センター、109～140 頁、査読無、2014 年 5 月 25 日

〔学会発表〕（計５件）

①添田晴雄「学級会の未来について語る」、日本特別活動学会平成 29 年度第 2 回研究会、玉川大学、町田市、2018 年 1 月 28 日

②添田晴雄「学級会における『比べ合い』の理論的考察――多様な他者と合意形成できる力の育成を目指して――」、日本特別活動学会第 26 回大会、椙山女子学園星ヶ丘キャンパス、名古屋市、2017 年 8 月 27

日
③添田晴雄「学習教授メディアとしての文字言語・音声言語の比較文化的研究――イタリア・スロベニア・日本の授業ビデオ分析をてがかりに――」日本比較教育学会第 53 回大会、東京大学本郷キャンパス、東京都文京区、2017 年 6 月 25 日
④添田晴雄「これからの学級活動（１）「学級会」の授業を考える」（日本特別活動学会平成 29 年度第１回研究会公開シンポジウム「学級会は、何をどのように話合い、どのように合意形成を図ればいいのか」、宗像市立河東小学校、2017 年 6 月 17 日
⑤添田晴雄「重点課題プロジェクト研究が明らかにしようとしているもの」、日本特別活動学会創立 25 周年記念集会記念パネルディスカッション、東京農業大学、2017 年 1 月 14 日

６．研究組織
(1)研究代表者
添田　晴雄（SOEDA, Haruo）
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：30244627

(2)研究分担者
森　久佳（MORI, Hisayoshi）
大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00413287

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）